

「復活の証人」

マタイによる福音書 二八章一一―一五節

南山教会 二〇二五年四月二七日

村山盛芳

礼拝堂にお集まりくださった皆さま、おはようございます。シルバーホーム「まきば」、名古屋東教会をはじめとしてYouTubeで礼拝にご参加いただいている皆さま、おはようございます。今日も一緒に、みことばに聴きましょう。

初代教会の人々にとって、イエスの復活という出来事は、実にリアルな体験でした。懐かしく愛する人が、不条理の中に取り去られ、奪われていきました。その喪失感、寂寥感、悔しさは、容易く想像できるでしょう。そういう空しさの中で、奪われ、失われたその人が、自分の目の前に現れる、例えば、震災で被災し、愛する人を失った人たちが、亡くなった人たちの後ろ姿を見かけた、夕暮れの街角に立っているのを見た、玄関から入って来た気配がした、等の不思議な体験を語られることがあります。こういう当事者の言葉を聞いて、「それは気の迷いだ、幻を見たのだ、思い込みだ」と部外者が一方的に断ずることは出来ないでしょう。

しかし、こういう話は、人々の心に不安を投げかけます。人間生活のさまざまな極面に、摩擦や動揺が生じ、混乱やパニックが起こる恐れもはらむのです。人間は、ある出来事について、見通しが効かなかったり、納得することが難しかったり、中ぶらりん、中途半端に放っておかれると、居心地が悪く、落ち着かないものです。合理的な説明がなされれば、何と

なく安堵する、ということがあります。因果応報の説明などは、その典型でしょう。

イエスの復活の出来事を巡っても、それと同じような動きが起こっていたことが、今日のテキストから知られるのです。墓を守っていた番兵たち、彼らは祭司長たちの下に、神殿警護に当たっていた下役達でしょう。番兵が配された経緯は、二七章六四節以下に詳しく記されています。ご丁寧に、墓に封印までしたと述べられています。この封印は、大地震で蓋石が転がった時に外れたのですが、その時には既に、墓は空で、主イエスの身体は見当たらなくなっていたのです。

ある意味では、復活の証人ともなった番兵たちは、さすがによく訓練されている者たちです。天使のお告げを聞いて、走って急ぎ帰った女たちよりも早く、祭司長の下へとご注進に及びました。四月は新入社員たちがいろいろ研修を受ける時ですが、初めに厳しく指導されることは、「ほうれんそう」と言われます。菜っ葉のハウレンソウではなく、「報告、連絡、相談」のことです。番兵たちはそのために、実に機敏に行動し「ほうれんそう」をしています。こういう風にちゃんとしつけられた忠実な兵隊たちなのです。全員が夜中に眠りかけて、誰も何も気づかなかった、ということは、およそ考えにくいことです。そんなことをしていれば、職務怠慢で、厳しく責任を取らされるでしょう。だから青くなって一目散に、主人のもとに「ほうれんそう」に及んだ次第です。

最近「ほうれんそう」ではだめだ、「ざっそう」でなければ、と言われます。「ほうれんそう」では、外見ばかり整えた、形式的、習慣的なものになりがちだということです。つまり一番肝心な、まずい情報、つまり失策や過誤を忖度し、表立って伝えられないことが多いからです。それよりも、「雑談をする中での相談」つまり「ざっそう」が人間集団の中では

必要だということです。普段から心が通じ合っていないければ、肝心なことは、表に出ないので。果たして会社組織ではどう働くかは定かではありませんが、教会では、確かにものをいうのは「ざっそう」があるかどうかでしょう。庭の草むしりしながら「ざっそう」にふける、というのは、実にふさわしいことではないでしょうか。牧師も、コンピューターの前から離れなければいけませんね。

番兵たちに「ほうれんそう」された祭司長と長老たちは、善後の策を講じねばならなくなります。もっとも怖いのは、人の口、人の噂です。人の口に廉は立てられません、対抗手段は、やはり偽りの「噂」をまき散らすに限るのです。フェイク・ニュースをばらまいて、対抗する、これは古今東西、どこでも変わらぬ手口です。そして「多額の金を与えて」、画策するというのも変わりません。「弟子たちが夜中にやって来て、我々の寝ている間に死体を盗んで行ったと言え」、ということです。フェイクというものは全くの荒唐無稽ではだめで、それらしさがないと成立しません。だから嘘は、真実にちよつと偽りを混ぜることが、最も効果的であると言われる通りです。

「夜、我々が寝ている間に」、この言葉にこそ復活の真実があります。神のなされるみわざの、確かな事柄です。人は嘘を言う時にも、どこかに真実を吐露してしまいます。「人が寝ている間に」、イエスの譬話の中に、これと同じ言葉が語られています。『成長する種の譬』です。「ある人が種を蒔いた。夜昼寝起きしている内に、種は育っていくが、どうしてそうなるかはその人は知らない。地はひとりでに実を結ばせるもので云々」。一粒の種の成長が、神の国の働きとして喻えられています。即ち、人間の手や知恵や、働きの及ばない所で、もつと言え、人間の力の尽きた所で、神のみわざは働くのです。人間が自分の力でど

うにかでできることについては、神はやすやすと手出しをなさらないのです。

詩編の詩人によれば、「神はまどろまず、眠ることはない」といいます。だからこそ人間は、安心して自らを手放して、眠りの中に自己を解き放てるのです。神のみ守り、みわざを信じない者は、安らかに眠ることはできないのです。眠れないことほど、人間の魂と身体を消耗させるものはありません。真の安心が得られないからです。それは神との平安を基にしています。「我々の寝ている間に」、イエスは復活された。人間の知らない所で、築かない所で、すでに生命は立てられ、よみがえるのです。

生命感に乏しい砂漠がきれいに思えるのはなぜでしょうか。砂漠は無機的な場所ですが、砂の創る風紋は、毎日毎時変化をして、美しくうねり、波打ちます。王子さまが語ります。

『砂漠が美しいのは…そのどこかに、ひとつの井戸が隠されているからだよ』。『星の王子さま』（サン・テグジュペリ）の知られた場面です。何も生命などない、という砂漠にも、生命の源である水を貯えている井戸を隠しています。私たちの目には見えないけれども、生命の源は確かにそこにあるのです。初代教会の人々が出会ったのは、実に、砂漠の中に隠された井戸、復活のイエスは、目に見えない井戸のような方として、今も、私たちと共におられるのです。私たちは、その井戸から生命の水を汲む復活の証人なのです。